

【お問い合わせ】

一般社団法人
日本養蜂協会

〒104-0033
東京都中央区新川二丁目6-16
馬事畜産会館6階

TEL 03-3297-5645
FAX 03-3297-5646

<http://www.beekeeping.or.jp>

養蜂技術指導手引書 V

平成30年度産地活性化総合対策事業
養蜂等振興強化推進事業(全国推進事業)

養蜂における衛生管理 ダニ防除技術

一般社団法人 日本養蜂協会

養蜂における衛生管理 ダニ防除技術

木村 澄
松山 茂
中村 純
浅田研一

ヘギイタダニの生物学 4

養蜂におけるミツバチヘギイタダニ 12

検査法 17

駆除法 19

ダニ駆除の具体例——福岡県の取り組み 22

Appendix 25

ヘギイタダニの生物学

養蜂業に甚大な経済的被害を与えているバロア病(Varroosis)は、体液を吸汁する外部寄生性のダニ、ミツバチヘギイタダニ(*Varroa destructor*)による。雌雄で外見が異なり、雌は長さ1mm幅2mmほどの扁平な楕円形で赤色～赤褐色であるのに対し、雄は白色～黄白色で長さ幅ともに1mmに満たない円形に近い形をしている。体液を吸って直接的に蜂を弱らせるだけでなく、この過程でチズレバネウイルスなどのウイルスを媒介する。ダニそのものについて知ることは、安全で効果的かつ簡便なバロア病対策を構築し、ダニに負けないミツバチを育種する基盤となる。



図1 ミツバチヘギイタダニ
上段は雌の若ダニの成長過程、下段は左が成熟雌、右が成熟雄

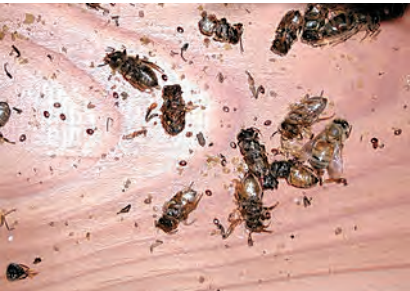


図2 強度にヘギイタダニに寄生された巣箱の様子

ヘギイタって何?

ミツバチヘギイタダニという名前を耳にして、ミツバチとダニはわかるけど、ヘギイタって何? って思った人はいませんか?

「へぎ板」は、木材を手を使って割るようにして作った厚さ2～10mmの板のことです。瓦屋根の下葺きに使ったり、そのままを使って屋根にしたものが柿(こけら)葺きの屋根です。「へぎ」の語は「剥(へ)ぐ」という手を使って割る所作を表す動詞が名詞化したもので、ヘギイタダニは「へぎ板」のように扁平なダニということです。

分類

ミツバチヘギイタダニは、トゲダニ目(Mesostigmata)、トゲダニ科(Laelapidae)、ミツバチヘギイタダニ属(*Varroa*)に分類される。*Varroa*属をトゲダニ科に分類することが提案されたのは1993年なので、それまで分類されていたヘギイタダニ科(Varroidae)とする分類とが、現在、混在している。

2000年に *V. destructor* が Anderson、Trueman によって新種として発見され、セイヨウミツバチの被害がこのダニによってもたらされていることが明らかになるまで、ミツバチヘギイタダニの学名は *V. jacobsoni* とされていた。*V. jacobsoni* は、オランダの動物学者 A. C. Oudemans が 1904 年にインドネシアのジャワ島でトウヨウミツバチ (*Apis cerana*) から発見し、名づけたダニである。このダニがセイヨウミツバチに寄主範囲を広げ、1950 年代以降、深刻な被害を及ぼしてきたと考えられていたが、1990 年代に Anderson らによって *V. jacobsoni* にはトウヨウミツバチでのみ繁殖し、セイヨウミツバチでは繁殖しないダニがいることが示された。さらに、ミトコンドリア DNA の解析結果から、トウヨウミツバチで繁殖するダニ (*V. jacobsoni*) とセイヨウミツバチに被害を与えているダニとは、遺伝子型が異なることがわかり、2000 年の新種 (*V. destructor*) 発見につながった。

これを受けて、現在知られている *Varroa* 属のダニ 4 種について、属名・総称・学名・和名を次のように整理する提案が 2017 年になされた。学名(斜体)のあとに命名者名、記載年、和名(坂本・岡部 2017 による)を記す(この手引き書では、以後この和名を用いる)。

<i>Varroa</i> 属	ミツバチヘギイタダニ属(属名)
varroa mites	ミツバチヘギイタダニ類(総称)
<i>Varroa destructor</i>	Anderson and Trueman 2000 ミツバチヘギイタダニ
<i>Varroa jacobsoni</i>	Oudemans 1904 ジャワミツバチヘギイタダニ
<i>Varroa rindereri</i>	Guzman and Delfinado-Baker 1996 リンデラーヘギイタダニ
<i>Varroa underwoodi</i>	Delfinado-Baker and Aggarwal 1987 アンダーウッドヘギイタダニ

これら 4 種のダニが発見された、あるいは寄生・繁殖することが知られている主なミツバチ種は下記の通りである。

ミツバチヘギイタダニ:	トウヨウミツバチ、セイヨウミツバチ
ジャワミツバチヘギイタダニ:	トウヨウミツバチ
リンデラーヘギイタダニ:	ボルネオ島のサバミツバチ (<i>Apis koschevnikovi</i>) から発見
アンダーウッドヘギイタダニ:	ネパールのトウヨウミツバチから発見

ミトコンドリア DNA の解析から、ミツバチヘギイタダニの遺伝子の型は少

なくとも6タイプ知られている。養蜂上もっとも重要なのは韓国型で、ヨーロッパ、中東、アフリカ、アジア、ロシア、南北アメリカのセイヨウミツバチから見いだされ、日本・タイ型よりも深刻な被害をもたらすとされている。日本・タイ型は、日本、タイ、南北アメリカのセイヨウミツバチから確認された。これらの型のミツバチヘギイタダニは、もともとセイヨウミツバチがいなかった韓国、日本、タイなどに生息するトウヨウミツバチからも見つかるため、これらの国がセイヨウミツバチを導入したあとに、もともと寄生していたトウヨウミツバチからダニがセイヨウミツバチに移り、それが世界に広まったとされる。日本のミツバチヘギイタダニの多くは韓国型である可能性が高く、このことから、日本のセイヨウミツバチのヘギイタダニの多くはニホンミツバチから移って来たわけではなく、他の国のダニが日本で分布を広げたと考えられる。

生活史

ミツバチヘギイタダニは、成虫(働き蜂・雄蜂)に寄生した状態か、幼虫または蛹に寄生した状態で見つかる。これら二つの状態のダニを、phoretic mites (便乗期のダニ)、reproductive mites (繁殖期のダニ)と呼ぶ。便乗期のダニは、体液を吸って栄養を摂取すると同時に、移動し分布を広げるためのいわば乗り物として蜂を利用している。すなわち、ダニに寄生された働き蜂が外勤や盗蜂に出るか分蜂すれば、ダニが巣の外に出て分布を拡大することにつながる。従って、分蜂を制御することはもちろん、狭い蜂場に近接して巣箱を配置すること

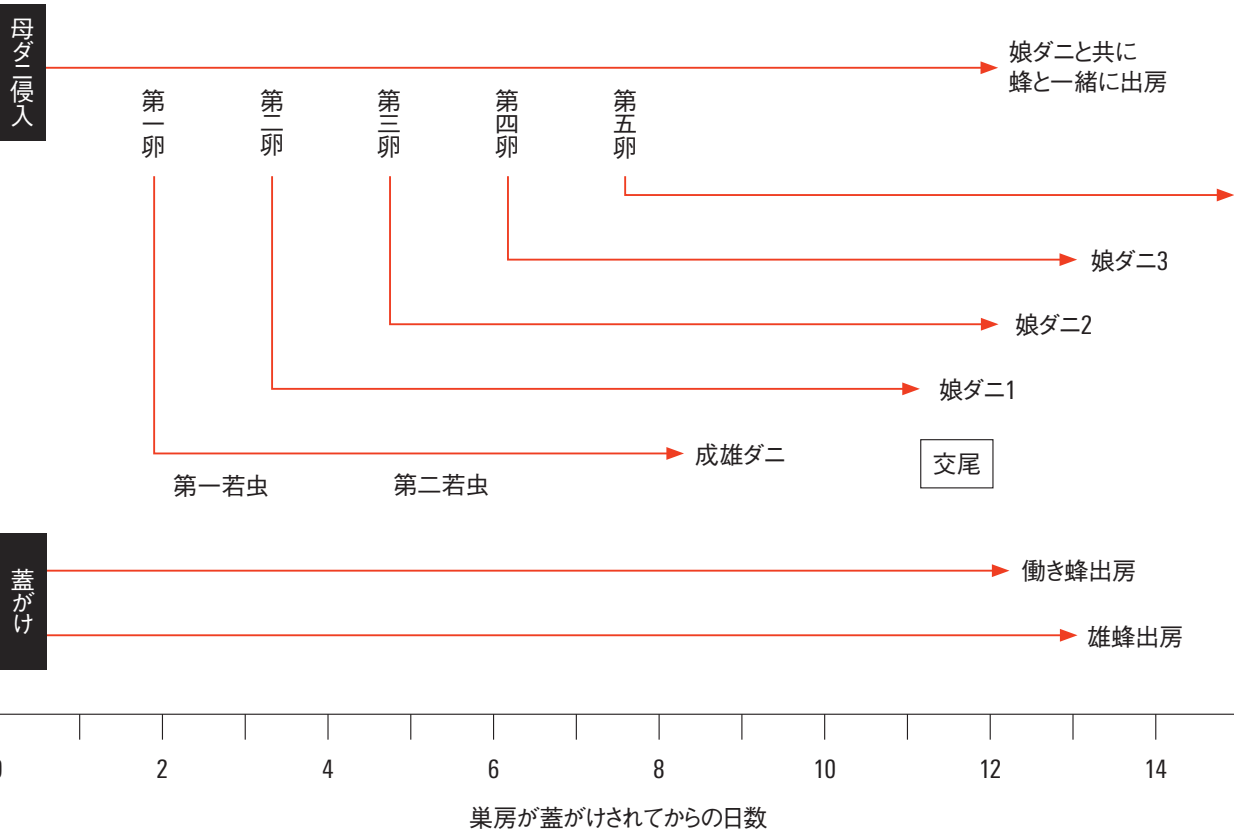


図3 ミツバチヘギイタダニの繁殖サイクル

や、蜜不足による盗蜂に留意する必要がある。便乗期のダニは、蜂が巣箱内で育児圏に来れば、蜂から降りて巣房に入り繁殖期のダニとなる。

交尾済みの雌ダニは、成長して蓋をされる直前の終齢幼虫がいる巣房に入る。このとき、雌ダニが繁殖に適した幼虫がいる巣房をどのようにして選ぶのか、幼虫が発する化学物質を手がかりにしているとの想定で研究が進められているが決定打は出ていない。ダニはおよそ3日間、巣房の奥で幼虫の餌と虫体の間に隠れるようにして過ごす。その間に巣房に蓋がされ、幼虫は餌を食いつくし前蛹となる。ダニは、有蓋巣房の中で幼虫の体液を吸い、産卵、繁殖する。まず、最初の一卵は、孵化成長して雄になり、その後、30時間に一卵のペースで産まれた卵はすべて雌に成長する。ダニの生長期間は、雄ダニで平均5.8日、雌ダニは6.6日で、第一若虫(protonymph)、第二若虫(deutonymph)を経て成ダニへと成長する。母ダニは蜂の蛹に穴を開け、若虫の食事を助ける「子育て行動(parental care)」を行う。有蓋巣房の中で成熟した雄は、あとから成長した雌ダニ(娘ダニ)と交尾する。2013年に、未交尾雌が雄を誘引し、交尾行動を解発する性フェロモン(3種類の脂肪酸とそれらのエチルエステル)が明らかになった。母ダニと交尾後の娘ダニは蜂が羽化・出房する時に外に出て行く。それまでに成ダニになれなかった娘ダニと雄は死んでしまう。働き蜂と雄蜂では、蓋されてから羽化するまでの期間が雄蜂のほうが1～2日長いので、母ダニが産める卵の数はどちらに寄生するかによって異なる。働き蜂の蜂児では最高5卵、雄蜂では6卵が産下される。従って、出房直前の働き蜂の巣房を開けると、母ダニ、雄ダニ、そして3頭の娘ダニが中になることになる。

ダニがどのくらい増殖するかについては、3か月で12倍という記述がある。1頭の母ダニから何頭の繁殖可能なダニが成長するか、および、そのダニが生涯の間に繁殖サイクルを何回繰り返せるかが基本的な要素となる。先に述べたように3頭の娘ダニはすべて繁殖可能なわけではなく、野外の蜂群を用いた実験観察で、働き蜂蜂児からは1.3～1.45頭、雄蜂児では2.2～2.6頭の繁殖可能なダニが生まれるとの報告がある。一方、繁殖サイクルは、実験条件下では最高7回のサイクルを繰り返したとされ、野外の蜂群ではそれは2回から3回と推定されている。実際の増殖率は、これらの基本的な要素と蜂群の状態・性質、さらに外部環境(天候、花粉・花蜜の流入量)があいまって決まる。晩夏から晩秋にかけてのダニの増殖は爆発的であり、多くの蜂群で越冬に失敗する原因となる。

冬季には女王蜂の産卵が止まり蜂児はいなくなるので、ダニは繁殖せず越冬する働き蜂に付いて冬を越す便乗期のダニとなる。成虫に便乗した状態で何か月も生存することが可能である。そのため蜂児がいない期間があっても、ダニを完全に駆除することは困難である。ミツバチヘギイタダニとセイヨウミツバチの関係は新しく、バランスが取れた状態(共存関係)にないので、ダニが増えすぎて越冬が失敗すればダニも絶える。一方、越冬前に弱った群を合同する、蜂群を暖地に移動させるなどの養蜂上の作業は、ダニにとっては生存・繁殖に好都合な条件を与えることとなる。

巣箱まるごと冷蔵してダニ退治

本稿でも解説しているように、ダニの繁殖は巣房に限られるので、巣を蜂児がいない状態にすることでダニを駆除する方法は以前から知られています。しかし、冬期以外で蜂児がいない状態を長く保つことは難しく(生物的にも養蜂管理上も)また、冬期も働き蜂についているダニを駆除することはできません。最近ワシントン州立大学の研究者が夏季に蜂群を冷蔵することで、蜂児をいない状態にしてダニを駆除する方法を考案したことがアメリカの養蜂誌に掲載されました。これは、8月に、巣箱ごと冷蔵して、女王蜂の産卵を中断させ一時的に有蓋蜂児が無い状態にして、冷蔵後殺ダニ剤で働き蜂についているダニを殺すことでダニをコントロールする方法です。冬期に巣内に有蓋蜂児が完全に無い状態にすることは難しく、また無い状態になったとしても早春に殺ダニ剤を使用すると春の採蜜期にかかってしまう懸念があります。これに対し、冷蔵することで完全に有蓋蜂児がいなくなり、8月以降に採蜜しないということであれば有効な手段かもしれません。ただし、巣間でダニは移動するので、蜂場すべての蜂群を冷蔵することができる、大きな冷蔵設備が必要であるし、また冷蔵が秋に蜂群にどのような影響があるかは不明です。まだまだ発展途上の技術ですが注目に値すると思います。

トウヨウミツバチには、ミツバチヘギイタダニとジャワミツバチヘギイタダニの2種のダニが寄生する。これらは雄蜂児でのみ繁殖し、蜂群に壊滅的な害を与えない。その理由は未だ明確になっていないが、働き蜂蜂児のサイズがセイヨウミツバチより小さく生長期間も短いためにダニが十分に増殖できない、働き蜂のグルーミングによりダニを取って捨てる行動が顕著である、複数のダニに寄生された雄蜂児は弱ってしまい羽化するときに巣房の蓋を開けられずダニを道連れにして死んでしまう、雄蜂児を育成する時期・期間がセイヨウミツバチよりも限定されている、などのダニにとっては不利な性質がトウヨウミツバチには揃っている。これらの性質がどのようなメカニズムで成立しているかを解明し、ダニに負けないミツバチの育種に役立てる必要がある。

感染・拡大の歴史

セイヨウミツバチはアフリカ・ヨーロッパが原産なので、ミツバチヘギイタダニがセイヨウミツバチに寄生するようになったのは、養蜂を目的として人為的にセイヨウミツバチをアジア地域に導入してからのことである。日本にはアメリカ経由で1877(明治10)年に導入され、韓国では1890年代とされる。セイヨウミツバチに被害を及ぼすミツバチヘギイタダニはトウヨウミツバチでは、日本からスリランカまで自然分布している。

トウヨウミツバチに寄生していたダニがどのようにセイヨウミツバチに移ったか、詳しいことはわからないが、1950年代以降、セイヨウミツバチにその存在が顕在化し、ほぼ世界中にダニが広まった。トウヨウミツバチから

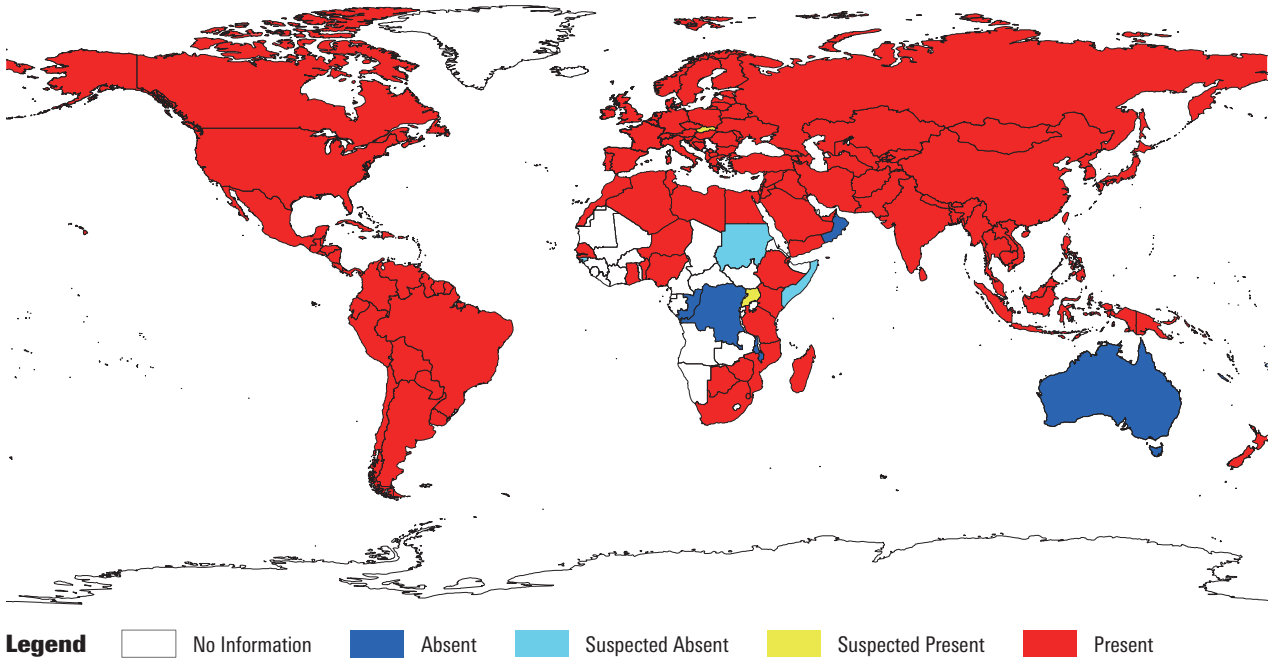


図4 ミツバチヘギイタダニの世界的分布
(Dr. Chase B. Kimmel) (フロリダ自然史博物館作成)

セイヨウミツバチへの寄主転換はすぐに起こった訳ではなく、徐々に起こったと考えられる。各国での発見記録、蜂群の輸出入の記録、ミトコンドリアDNAの解析結果から得られた韓国型および日本・タイ型のダニの分布を総合し、ダニの感染・拡大経路として推測された二つのルートがあると考えられている。一つは、極東アジアから極東ロシアを経てヨーロッパさらに北アメリカへのルート。もう一つは、日本からパラグアイを経由して、南北アメリカに広まったルートである。セイヨウミツバチによる養蜂が盛んに行われる国でミツバチヘギイタダニが発見されていないのはオーストラリアだけである。

各国でダニが確認された時期を年代順に並べ、2000年に発表された論文から判明したその国で採取されたダニの遺伝子型を付け加えると表1のようになる。

表1からわかるように日本では1960年代にはセイヨウミツバチに寄生していたと考えられ、それがジャワミツバチヘギイタダニかミツバチヘギイタダニかは、はっきりしたことはわからない。現在日本の蜂群の多くは、ミツバチヘギイタダニに寄生されていると考えられる。

南北アメリカには、ヨーロッパ経由の韓国型とパラグアイ経由(起源は日本とされている)の日本・タイ型の両方のダニがいる。韓国型のダニの方がより大きな被害を与えるとされていて、今後、これらの地域でどちらの型のダニが優勢になるかを注視している研究者がいる。一方、ダニと共存している期間が長いほど、耐性を示すセイヨウミツバチが出現する可能性は高いとして極東ロシ

表1 ダニが確認された年とその遺伝子型

年	国(地域)	遺伝子型
1952	極東ロシア	韓国型
1955	パキスタン	
1958	日本	日本・タイ型
1959	中国	韓国型
1967	ブルガリア	
1971	パラグアイ	
1972	ブラジル	日本・タイ型および韓国型
1977	ドイツ	韓国型
1980	ポーランド	
1982	フランス	韓国型
1987	アメリカ合衆国	日本・タイ型および韓国型
1989	カナダ	日本・タイ型および韓国型
1992	イギリス	韓国型
1998	アイルランド	
2000	ニュージーランド北島	
2006	ニュージーランド南島	
2007	ハワイ(オアフ島)	
2008	ハワイ(ハワイ島)	

* 初確認されたダニとその遺伝子型を調べたダニは同じでない。また現在の遺伝子型と一致しないことも考えられる

アの蜂に注目している研究者もいる。実際、米国農務省は1997年に沿海州から、抵抗性のミツバチ系統を導入し、その普及に努めている。自然集団の中から進化的に抵抗性を進化させた系統を見つける試みが行われている。

その他にも、ミツバチヘギイタダニに抵抗性のあるセイヨウミツバチ系統が見つかっている。そのほとんどは、巣内の掃除(感染された幼虫を巣の外に運び出す)をよくする群か、グルーミングをするかによって、抵抗性を持つ。グルーミング行動をする成虫は、自分自身や同じコロニーの蜂を足を使ってくしのようにすく。そのことでダニも蜂から落ち、多くのダニが減少する。また、ダニの脚などをかじることも、グルーミングに含まれている。

衛生的行動を頻繁に行う蜂群は、有蓋、無蓋の蜂児の種々問題を察知し、問題ある蜂児を取り除く。このような蜂は有蓋の巣房の中のダニも察知し、蓋を取り除いて蜂児を捨てる。この行動により、多くの場合寄生している多くのダニも一緒に捨てられる。Varroa Sensitive Hygiene (VSH) (ヘギイタダニ感受性衛生行動)はこの最たるもので、VSH系統のミツバチは、巣房の中のダニを発見でき、ダニが繁殖している場合だけ蜂児を取り除くと言われている。

オーストラリアは、ダニの侵入を防ぐため、セイヨウミツバチの輸入を制限す

るとともに、すぐ北に位置するパプアニューギニアからトウヨウミツバチの分蜂群が飛来し、一緒にダニが入ってくることを警戒している。

ジャワミツバチヘギイタダニは基本的にはある一つのタイプのダニだけがセイヨウミツバチに寄生し被害を及ぼす。パプアニューギニアのセイヨウミツバチで広く分布しているが、近隣の国々では分布は広がっていないとされている。

1992年には、トレス海峡諸島(パプアニューギニアとの約150kmの海峡に274の小島が点在する)の島にトウヨウミツバチが飛来し、その中にジャワミツバチヘギイタダニが見つかった。2007年には、北部の観光拠点都市ケアンズにトウヨウミツバチが定着したが、ダニは見つかっていない。それ以降、分蜂群にダニが寄生していないかどうかを調べるため、捕らえた分蜂群をエタノールに浸して振動をかけ、落下したダニを数える方法を開発してダニの侵入に目を光らせている。

最近でも2018年6月にメルボルンで、ミツバチヘギイタダニに寄生されたセイヨウミツバチ群がアメリカからの船に積まれた木枠から見つかり、新聞等でも大きく取り上げられた。その後も港周辺で監視が続けられている。

養蜂におけるミツバチヘギイタダニ

分布拡大の理由

現在の様にミツバチヘギイタダニが世界的に分布を広げた背景には、セイヨウミツバチがトウヨウミツバチの持つ防除方法(グルーミングが最も重要な方法と考えられている)を持っていなかったことがあるが、セイヨウミツバチ養蜂にも大きく影響していると考えられる。まず第一に、養蜂においてセイヨウミツバチは、野生状態に比べて非常に高密度で飼育され、そのことは、ミツバチヘギイタダニが他の群に移る可能性を高めることがあげられる。第二に、セイヨウミツバチ転飼が、分布を広げる要因にもなったと考えられる。第三に、多くの国では野生のセイヨウミツバチが感染源のプールになったことも考えられる。

ヘギイタダニの影響

経済的影響:アメリカヘギイタダニ寄生による経済的損失の推定値を正確に得るのは難しい。しかし多くの群がダニの感染によって崩壊しており、多額の経済的損失を与えていることは確かである。現在ヘギイタダニを何らかの方法で制御することなしには、ほとんど養蜂が成り立たないといっても過言ではない。このために殺ダニ剤などの購入と施用に多くの費用と時間をさかなくてはいけない。

人間の管理下にある蜂群は、殺ダニ剤でヘギイタダニがコントロールされているので、ダニに抵抗性のミツバチが自然選択される可能性は小さい。一方現在野生系統はほとんどダニの影響で、多くの先進国では生存できない状況である。しかしこのような状況でコントロールすることなく残ってきた集団は、ダニに対する抵抗性を維持している可能性がある。先に触れた極東ロシア系統もそのような中発見された。

群への影響:ヘギイタダニは寄生によって成虫を殺さないが、その寿命を短くし、行動も変えると考えられている。成虫よりも影響が大きいのは蛹・幼虫で体液を吸われることによって発達が阻害される。このことによって多くの蜂群が被害を受けることは事実であるが、もっと重要な問題は、ダニによるウイルスの媒介である。

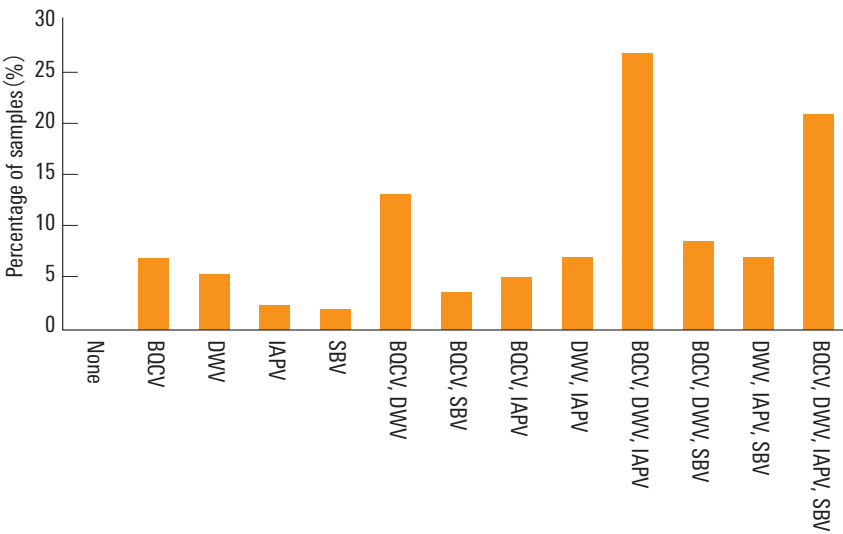


図5 わが国の健康群から検出されたウイルス
Y軸は調査サンプルあたりの百分率。例えばウイルスを持っていなかったサンプルは一例も無いのに対し、BQCV、DWV、IAPV、SBVの4種のウイルスを同時に持っていたサンプルは20%を占めた (Kojima et al. 2011より)

ウイルス

現在では20種以上のウイルスが知られ、そのほとんどはダニによって媒介すると考えられている。ミツバチのウイルスは50年以上前から知られているが、1980年代にダニが蔓延するまでは重要視されていなかった。日本では、ウイルスによって引き起こされる病気は家畜伝染病予防法で指定された疾病ではないが、蜂群に大きな影響を及ぼしていると考えられている。2009年の調査でも、日本の全ての調査コロニーが何らかの病原性のウイルスを持っており^[図5]、同時に3種以上のウイルスを持っているコロニーも数多く存在していた。2013年のアメリカの蔓延状況調査でも、調査群のBQCVは80%以上、DWVは80%保持されていた。その他のウイルスも20%以下であったが保持されていた(p.24「飼育ミツバチの病原体遺伝子保有状況調査」も参照、ミツバチがかかるウイルス病についてはAppendix参照)。

ダニによって引き起こされる病状

ウイルスの典型的な症状以外にも、ヘギイタダニの寄生によって起こる一連の病状は、ひっくるめてバロア病(varroasis)と総称され、家畜伝染病予防法の届け出伝染病に指定されている。ミツバチのコロニーを弱らせ、最終的に崩壊させる状態をさす。最近では、寄生ダニ症候群 (Parasite Mite Syndrome, PMS) とよばれることも多い(varroasisとPMSとの間で厳密な使い方の区別はないようである。一般的には、PMSは、巣に観察される状態をしめし、また、より被害の進んだ状態を表す)。PMSには、特徴的な症候が見られるが、それらは、ウイルス感染後の2次感染が考えられ、引き起こす病原体はまだ特定されていない。症状は他の病気(アメリカ腐蛆病、ヨーロッパ腐蛆病、サックブルード病)に似ている。

PMSの症状

- 有蓋蜂児がスポット状になる。
- ダニが巣房の中だけでなく、有蓋の上や蓋がけしていない白くなった幼虫の上を這い回る。
- 成虫の数の大幅な低下が見られる。
- DWVの蔓延による縮れ羽根を持つ個体の増加。
- 腐蛆病と異なり幼虫が色を変えて腐敗し始めるまで、臭気を発しない。また腐った幼虫は糸を引かない。
- 頭をかじられた蛹が観察される。
- アメリカ腐蛆病と同様、蓋が陥没したり穴が開いたりする。
- 幼虫は巣房の奥ではなく、正面から見て巣房の下部にみられる。

薬剤抵抗性の発達

多くの節足動物では、合成化学薬剤の利用により、薬剤抵抗性が発達する。ミツバチヘギイタダニでも殺ダニ剤に対する抵抗性を持つダニの発達が問題になっている。抵抗性を持つダニの早期発見は非常に重要であるが、養蜂家自身がそれを見つけることは難しい。殺ダニ剤の中でもピレスロイド系ダニ剤 tau-フルバリネート（アピスタン）への抵抗性の発見は1991年イタリアに遡る。この抵抗性のダニがミツバチの転飼に伴って周辺諸国に広まったと考えられる。アメリカにおける最初の発見は1997年でその後数年の間にアメリカ全土に急速に広がったと考えられる。ダニの抵抗性の発達がこれまでに何度起こったかは明らかでない。一般にピレスロイド系農薬に対する抵抗性には3種のメカニズムが考えられる。第一は、殺ダニ剤を無毒化する酵素の発達、第二は、殺ダニ剤のターゲットサイトの変化、第三は、節足動物表面のクチクラ層の物理的変化である。tau-フルバリネートに関しても、ヘギイタダニでこの3種の変化による抵抗性が知られている。最も研究が進んでいるのはナトリウムチャンネルの突然変異でナトリウムイオンを細胞内に取り込むチャンネルの形状を変化させる。世界的に知られている tau-フルバリネートの抵抗性の多くはこのタイプのメカニズムによるものである。

日本では認可されていないが、海外で広く使われていたフルメトリンは、tau-フルバリネートと同じピレスロイドなので交差性がある。有機リン系のクマホス(Coumaphos 商品名Checkmate)への抵抗性も知られている。アピバールの商品名で販売されているアミトラズ(Amitraz)は、比較的抵抗性が発達しにくいと考えられ、販売会社はヘギイタダニでは抵抗性は発達しない*としているが、メキシコやクロアチアなどで、感受性の低下が報告されている。アミトラズに対して抵抗性を獲得した害虫の例は多数報告されており、ヘギイタダニでも予断は許せない。

抵抗性の蔓延のメカニズム

抵抗性への突然変異が頻繁に起きることは考えにくい。しかし、図9に示したように、抵抗性を持つダニが集団の中に存在した場合、それが低頻度であって

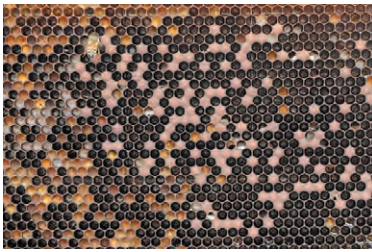


図6 典型的なPMSの巣枠

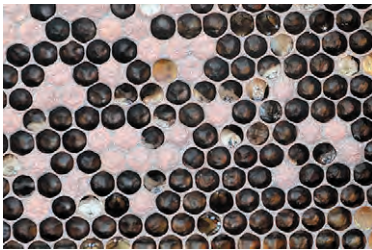


図7 死んで腐った幼虫が観察される



図8 働き蜂によって蓋が開けられ頭だけ取り除かれた蛹が見られる

※アピバールの英語のカタログには
Apivar users world-wide have been unable
to detect any resistance to Apivar's active
ingredient. (世界のアピバールユーザーは
アピバールの有効成分に対する抵抗性
を検出することができない)とある。

も、ダニ剤の使用が抵抗性ダニの選択に働き、この図ではわずか4世代で群の中に抵抗性ダニが蔓延することになる。

		耐性率
最初のダニ		8%
ダニ剤投与		25%
2か月後		25%
ダニ剤投与		83%
2か月後		83%
ダニ剤投与		96%
2か月後		96%

図9 抵抗性のダニが増加するメカニズム
赤色の丸は抵抗性のダニを示す

ダニ研究の進展とリチウム

薬剤を使ったダニ防除は、いつか抵抗性ダニとのいたちごっこになります。そこで、薬剤だけでなくあらゆる選択肢を利用して対処していこう、という考え方に基づいて選択肢を増やす研究が進められています。

2014年に化学構造が判明したダニの性フェロモンは、ダニの交尾行動をかく乱させたり、便乗期のダニが本来の蓋がけ直前の巣房に入るのを混乱させる効果があると報告されています。また、細菌 (*Bacillus thuringiensis*) のある系統に、ダニを殺すがミツバチには影響を与えないものが発見されました。同様の効果がある真菌類(カビ・キノコの仲間)も発見されました。さらに、チズレバネウイルスが増えるのを抑える目的で、RNA干渉という遺伝学の現象を利用した研究も進められています。

最近そのRNA干渉技術を利用したダニの防除法を開発する過程で、RNAの溶液に含まれていた塩化リチウムがダニに効果があったことを偶然見つけたという論文が発表されました。塩化リチウム自体は、現在は毒物としての法規制はありませんので、将来的にはダニ剤開発に結びつくかもしれません。しかし、どういうメカニズムでダニに有効なのかは明らかでなく、また塩化リチウムを巣房の中のダニに運ぶ手立てが考えられず、糖液の中に加えて与えた場合、巣房内に貯えられ、濃縮される可能性も否定できません。高濃度や連続投与では、成虫に害があることも確認されていますので、実際に利用するには、これらの点を克服する技術開発が必要そうです。

ダニ論文数はこの10年で3倍に増加!

世界中で発表されたダニに関する学術論文数の推移を見ると、最近では年間150編ほどでセイヨウミツバチに関する論文数(771編、2016年)と比べると見劣りますが、この10年ほどで約3倍に増加しています^[図10]。その内容の傾向をいくつかのキーワードを使って調べてみると、農業に関するものは横ばい、ウイルス、分子生物学、育種、フェロモンに関する論文が増加していることがわかりました^[図11]。ウイルスは、チズレバネウイルス(DWV)、急性麻痺病ウイルス(ABPV)などに関するもの、分子生物学では育種と関連してダニ抵抗性の分子マーカーなどの論文が多いです。フェロモンでは、2013年にダニの性誘引フェロモンの化学構造が明らかになりました。私たちが論文の成果をすぐに使えるわけではありませんが、その数や種類が増えていくことに期待したいと思います。

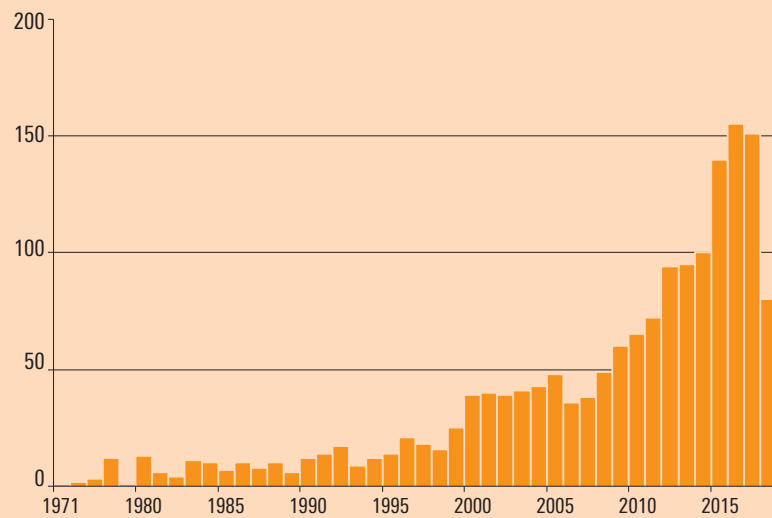


図10 ヘギイタダニの名前(Varroa)で検索された学術論文数の推移
(SciFinder Scholar調べ、2018年8月まで)

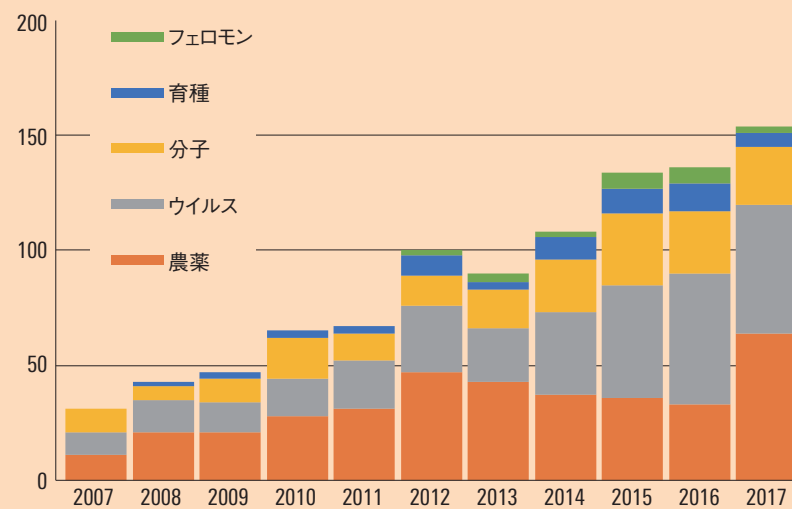


図11 ダニに関する学術論文のうち、上のキーワードを含む論文数
(SciFinder Scholar調べ、2007～2017年)

検査法

バロア病の治療には、いくつかの方法があり、どの方法を選択するかは診断においては、ミツバチヘギイタダニの寄生率を把握する必要がある。バロア病の深刻度は、基本的にはダニの寄生率(あるいは寄生総ダニ数)で評価することができ、この深刻度に基づいて、適切な方法を採用する流れになるからである。

ミツバチヘギイタダニは目視で検出できる大きさがあり、巣箱の底や巣門前に落下したもの(多くは死体)、あるいは働き蜂や雄蜂の体表に寄生しているもの、さらには蜂児(蛹)に寄生しているものを直接肉眼で見ることができる。また、ダニの吸血による体液不足やチズレバネウイルスの感染が原因での翅の伸張異常も肉眼で確認でき、バロア病の深刻さを養蜂家でも知ることができる。

ダニの寄生の深刻度を、海外ではダニの自然落下数(寿命等による)を基準に判断することが多いが、日本で普及している巣箱では、これを求めにくい。したがって、以下の方法において、ダニの寄生率を求めることを推奨する。

粉糖法(シュガーロール)

一定数(蜂の重量を量るのでもよい)のミツバチを、蓋の中心部に2mmメッシュの金網を付けた円筒形の容器に入れ、ここに粉糖(製菓用のアイシングシュガーで、コーンスターチ等を添加していないもの。給餌用の白砂糖ではだめ)を、大さじ山盛り1杯(7g)以上を入れて容器を回転させ、働き蜂全体に粉糖をまぶすようにし、そのまま1分間待つ。これでダニが働き蜂から分離するので、蓋を下にして容器を1分間軽く振りながら、粉糖とダニを金網部分から外に出す。粉糖とダニの混合物は目の細かい網じゃくしなどに入れて水で砂糖を溶かし流すことで、ダニを目視で数えることができる(ダニはこの時点では活動性を失っており非常によく歩く)。この方法は非破壊的検査法で、使用した働き蜂を粉糖が付いた状態で蜂群に戻すことができ、ミツバチへのダメージがほとんどない。計数したダニの数は、使用した働き蜂数で除算し、さらに100をかけて寄生率(ダニ数/働き蜂100匹)とする。無蜂児期であればそのまま寄生率として利用できるが、雄蜂時期であれば蜂児に寄生しているものを勘案し、求めた値を2倍して寄生率とするといった方法もある(p.18「シュガーロールのやり方」参照)。

シュガーロールのやり方



図12 準備するもの：新聞紙、ミツバチの量をはかるもの（写真は、計量カップ（100cc））、ふるい、砂糖とミツバチ成虫を入れて混ぜるもの（写真は、果実酢作成用の筒）、砂糖（粉糖）（農研機構畜産研究部門は100g。もっと少なくとも良いかもしれないが、試していない）



図13 カップいっぱいのミツバチ



図14 筒を激しく振る



図15 砂糖まみれになったミツバチ



図16 ふるいで砂糖とダニを分離



図17 採集されたダニ

雄蜂児法

ミツバチヘギイタダニは蛹期間の長い雄蜂の蛹を好んで寄生するため、雄蜂の蜂児がある、春から夏にかけてはこれを用いた寄生率検査法が実施できる。防除を兼ねて、雄蜂巣房で構成された巣を作らせ、有蓋蜂児となったものを200 巣房程度検査に利用する方法と、巢板下部などにできた雄蜂巣房を利用する方法がある。

有蓋蜂児の蓋を切り取り、ダニの寄生を検査する。蓋を開けた巣房を分母として、寄生が見られた巣房を除算して、寄生率を求める。

この寄生率については、以下のように防除に反映させる。春季に、2%未満の寄生率(100 巣房検査してダニ2匹)であれば、すぐに対策を取る必要はないが、2～4%であれば、そのシーズン中の防除計画を立て、4%超であればすぐに防除を必要とする。初夏に寄生率が3～7%であれば何らかの防除を必要とし、7%超であれば殺ダニ剤による緊急防除が必要となる。夏に7%未満の寄生率であれば、何らかの防除を行い、10%以上であれば緊急防除を必要とするといった基準を設けて、寄生率に応じた防除を講じるのが総合的防除(Integrated Pest Management, IPM) の考え方である。



図18 木枠に作らせた雄蜂児のみで構成された巣(ダニ駆除にも利用可能な方法)

駆除法

ミツバチヘギイタダニは産卵能力を持つ成熟雌が、巣房間を移動し、また雄蜂や働き蜂の体表上にいることで蜂群間を移動して、子孫を残す。ただしミツバチの蛹で吸血する以外には増殖することができないので、蜂児がない条件下(越冬期など)は、雌ダニが加齢し、自然落下などによる死亡率も上がる。蜂児のない時期にはダニの数は自然に減り、また相対的な繁殖力も低下していると考えられる。このため、ダニの防除適期は無蜂児期となる。したがって、基本的な防除のタイミングは次の4点をあわせて考える必要がある。①蜂児のない時期であればダニに直接薬剤が暴露する、②巣房内にいるダニに対しては薬剤が届かない、③蜂児が連続して作られているときには、ダニも若返って繁殖力が高まっている、④ダニが雄蜂の蛹を好むこと、また雄蜂に付着して他の巣に入り込むことが多いこと、である。

これらのため以下のような問題がある。①巣房外で雌ダニに薬剤が暴露する条件下でのみ駆除が可能である、②巣房内にいるダニには接触毒性の薬剤では防除ができない、③蜂児が連続して作られている状況ではダニを減らすことは難しい、④近隣に感染群がいる場合、雄蜂の迷い込みや盗蜂などによるダニの感染を防げない。

総合的防除の考え方では、蜂場の立地の見直し、衛生行動にすぐれた系統の選抜・飼育といった、養蜂スタイルそのものの改善から、雄蜂児除去や女王蜂隔離による無蜂児期間の調整、さらには準化学剤(国内では登録剤は現状ではない)、最終的に合成化学薬剤の選択といった状況に応じた選択肢をできるだけ多様に用意しておくのが基本である。

ダニの感染は蜂群間距離が100m以上であれば起こりにくいとされるが、これはすなわち、商業養蜂における一般的な蜂場内においては、もし1群でも感染群がいた場合、同一蜂場内のすべての蜂群が感染しているということである。蜂場間距離は、腐蛆病などの感染予防に2～3kmが設定されることも多いので、必ずしも感染しやすい状況にはないといえるが、蜂場内のみならず地域の蜂場すべてが、同一時期に同じような防除を行うことが望ましい。ミツバチ側の育児サイクルを考えると、無蜂児期であれば、防除の効果が得られやすく、蜂児の生産が続く時期には効果が得られにくいことになる。雄蜂の蜂児がたくさんある場合には、働き蜂の蜂児への寄生は少ない傾向があり、病害

の影響が見えにくい^が、蜂群内のダニの数は増加している可能性が高い。したがって、薬剤防除の場合は、無蜂児期を狙うのが有効である。ただ、防除時のダニの寄生率が高い場合には、無蜂児期の薬剤防除でも、1%以上のダニ寄生率が持続する（防除失敗）ことがあり、あらかじめダニの寄生率を抑えておくことが重視される。このため、薬剤に依らない方法と薬剤防除をうまく組み合わせる方法の採用が望ましい。ダニに対する駆除効果は、合成殺ダニ剤であっても100%ということはなく、根絶はほぼ不可能と考える必要があり、寄生率に応じて、以下の方法を組み合わせて実施する必要がある。

生物学的方法

雄蜂児誘引法

雄蜂児は働き蜂の蜂児の10～12倍、ミツバチヘギイタダニを誘引することが知られている。ミツバチは、一般的な飼育環境では、早春期に雄蜂の巣房が不足するため、空の枠（木枠のみ）を蜂群内に挿入すると、雄蜂用の巣房のみで構成された巣を作る。女王蜂もすぐにこれに産卵を開始するので、比較的短期間に大量の雄蜂児が得られる。全体が蓋掛けされたら、これを取り出して、廃棄する（廃棄の際、100～200巣房についてダニを確認して寄生率を求めておく）。今や古典的方法と呼ぶべきではあるが、採蜜など生産期でも実施でき、初期寄生率にもよる^が、数回の試行で夏までの間、ダニの数を抑えておくことに成功する。

女王蜂隔離法

無蓋蜂児期を設けるために、女王蜂を王籠等に入れて巣箱内で隔離し、一時的に産卵を止め、ダニが寄生可能な巣房がない状態を作る方法である。通常、20日間、女王蜂を隔離する。隔離だけではダニの増殖を一時的に遅らせるだけの効果しかない^が、後述するように化学的防除との併用で、薬剤の有効性を向上させることができる。

化学的防除

合成殺ダニ剤

現在（2018年8月）、日本国内で使用可能なミツバチヘギイタダニ用に承認のある動物用医薬品は、フルバリネートを主成分とするアピスタンと、アミトラズを主成分とするアピパールの2種類である。いずれも短冊状のプラスチック片に薬剤が含まれており、これを巣板間に懸下して使用する。周辺を歩き回る働き蜂の体に薬剤が移り、これが巣箱全体に広がることで、巣内を歩き回り成虫の体表に付く雌ダニに効果を発揮する。ミツバチに対しての安全性もきちんと検討された選択性の高い薬剤である。フルバリネートに較べてアミトラズは遅効性とされる^が、巣箱内での使用時間はいずれも6週間である。投与期間が長いため、生産計画との関係で防除期が遅くなると、ダニの数が多くなりすぎて、ダニの寄生率を必要なレベルまで下げることができない場合がある（防除直後に寄生率1%超なら、防除失敗と考える）。無蜂児期に投与する方が効果は高い^が、北日本では無蜂児期が厳冬期に当たり利用しにくい。ただ、沖縄など、夏の高温期に無蜂児期となる場合には薬剤の効果が得られやすい。

感受性回復

本文で記載されているように抵抗性が発達した系統でもしばらく殺ダニ剤を使用しないことで感受性を回復することが知られています。基本的には、ランダムドリフトや感受性遺伝子の流入で抵抗性遺伝子の頻度が低下するためと考えられます^が、抵抗性遺伝子を持つことが、殺ダニ剤の淘汰圧がなければ、生存に不利である可能性も指摘されています。しかし、最近、クマホスに対して抵抗性を発達させたダニを持つ群に5年間殺ダニ剤を与えていないにも拘わらず感受性を回復しない例が報告されています。この研究を行ったアルゼンチンの研究者は蜜ろうに残留した殺ダニ剤成分のためかもしれないと推測していますが、全く別のメカニズムの存在も否定していません。これはまれな例かもしれませんが、少なくともろうに殺ダニ剤成分が残留することは明らかなので、気をつける必要があります。

合成殺ダニ剤の中には、防除効果が高い一方で、ダニが抵抗性（薬剤耐性）を発達させるものがあり、海外では20年以上前から報告がある。ダニが薬剤耐性を獲得した場合、薬剤の連用により、薬剤耐性のダニを選択的に増やすことになり、急速に効果が失われるため、複数剤の交互利用が推奨される。ただし薬剤耐性は固定されにくく、適切に無投与期間（2～3年）を設けることで、再度、薬剤が効果を示すようになる。また脂溶性薬剤が、巣の蜜ろうに吸着しやすいため、巣板に高濃度に蓄積が見られる場合もある。

有機酸類

蟻酸やシュウ酸、乳酸などの有機酸類は、合成殺ダニ剤とは異なりダニ側の抵抗性を発達させることがないため、ミツバチヘギイタダニの防除ではよく利用される。海外では蟻酸やシュウ酸を利用した製品もある^が、国内では未承認となっている。蟻酸の場合は、巣内で蒸散させて用いるの^が一般的で、シュウ酸は数%の濃度に糖液で調整して蜂にかけるように処理することもある。

ダニ駆除率は、合成殺ダニ剤に較べて低くなるので、寄生率が高い場合には、選択肢としては次点となる。蟻酸は、有蓋蜂児に寄生しているダニにも効果があるとされる^が、気温が30℃を超えるような高温期には、蜂児や女王蜂の損失などの副作用が指摘されている。シュウ酸は、単回処理が原則で連続使用は推奨されておらず、無蜂児期か、分蜂蜂球に使用する。

植物抽出成分

タイムの精油の主成分であるチモールが製剤化されて利用されている。数種の製品がある^が、いずれも70～90%程度のダニ駆除率といわれ、また報告によって大きな駆除率の差がみられる。有蓋蜂児内のダニにも効果があるとされる^が、文献によって効果はまちまちである。国内でも承認・販売に向けた動きが見られる^が、現状ではまだ市場に現れていない。なお、チモールも蜜ろうへの残留が知られる。

ダニ駆除の具体例

福岡県の取り組み

福岡県におけるダニの浸潤状況調査

2010年頃から福岡県養蜂組合員の中で、ミツバチヘギイタダニ(以下ダニ)等の衛生問題がクローズアップされてきた。そこでダニ被害について現状を把握するため、県内のダニの浸潤状況調査を実施した。

県養蜂組合員4名から5群ずつ提供してもらい、計20群の雌雄成蜂数、雌幼虫数(巣房面積から算出)、および雌雄成蜂と幼虫各50頭に寄生するダニ数を調査した。

調査期間は、2011年7～11月、2012年2～6月の月1回の計10回行った。なお、組合員には駆除等も含め通常どおり管理してもらった。

- その結果次のことが判明した。
- 1) 秋口にダニが雄の幼虫に寄生するとダメージが大きい。
 - 2) 余分な雄巣房はカットして、ダニ汚染状況の指標とするとよい。
 - 3) 合同する場合は、合同後、雄の幼虫数、そのダニの付着状況を把握する必要がある。
 - 4) 箱底にダニを発見したら廃群となる可能性が高い。
 - 5) 駆除剤は少なくとも年2回、春の暖かくなる前、採蜜終了直後に投与する必要がある。
 - 6) 駆除剤は2種類の異なる薬剤を交互に使用することが重要である。
 - 7) 駆除剤投与期間は必ず6週間以内を守ることが重要である。
 - 8) 寒暖の差が大きくなる秋口に栄養剤を補給すると効果的である。

ダニ駆除適期の調査および対策

ダニの積極的な駆除、防除目的に雄蜂誘引巣脾(以下トラップ)を用いたダニ駆除適期の調査を2015年に実施した。1組合員の1蜂場20群(巣板3～4枚)を供試してもらい、調査開始前のみダニ駆除を行い、調査中は駆除剤、栄養剤等は未使用にした。ダニ汚染状況が均一となるように区分し、5群ずつ4区設定した。ただし蜂場内での巣箱の移動は行わなかった。試験区は次のとおり。

- 1区は4月、5月、6月上旬に計3回、トラップを各巣箱の中心に1枚設置

- した。
- 2区は5月、6月上旬に計2回、3区は6月上旬1回のみトラップを設置した。
- 4区はトラップ未設置とした。なお、調査方法は前回調査と同様に行った。

その結果次のことがわかった。

- 1) トラップでダニを誘引しても群勢は変わらない。
- 2) 誘引する回数は多いほど良いとは限らない。
- 3) 4月からトラップを仕掛けると秋までのダニの総数は少なくなる。

このことは、4月の総ダニ数はいずれの区も同等数であったが、4月にトラップを仕掛けた1区はトラップ内のダニを排除したため、その後の増殖が抑えられたと考える。

- 以上の結果から雄蜂トラップの設置時期は次のように提案する。
- 1) 4月前(福岡県では)に誘引トラップを開始。
 - ① 早春のダニ駆除剤投入時と同時期に投入する。
 - ② 駆除剤投入期間終了後(6週間)直後に投入する。
 - 2) 誘引トラップは月1回ではなく、トラップを取り出したらすぐ入れ替える。
 - ① 特に早春はトラップ設置後、有蓋を確認したらトラップを取出し、直ちに新しいトラップを設置する。但し、交尾に必要な雄蜂数を確保しながら調整すること。
 - 3) トラップを使わない、設置が難しい場合は、次のことを提案する。
 - ① 早春のダニ駆除剤投与期間終了(6週間)後、ダニの浸潤調査を実施(雄房内のダニ数確認)し、大量のダニが確認されたら、一旦雄房をカットし、次の有蓋雄房ができた段階で再調査し、できればこれを繰り返す。

ダニ防除総合対策

二つの調査および対策を踏まえ、あくまで福岡県における定地養蜂の採蜜終了時期が6月中旬の場合であるが「ミツバチ強化のためのダニ防除対策」を図19にまとめた。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
駆除剤		←→							←→			
駆除剤						←→						
幼♂管理			←→									
♂トラップ			←→									
栄養剤	←→								←→			

図19 ミツバチ強化のためのダニ防除対策
(福岡県における定地養蜂の採蜜時期6月までの場合)

表2 病原体遺伝子保有状況調査結果

	セイヨウミツバチ30群あたり		ニホンミツバチ11群あたり	
	保有数	保有率	保有数	保有率
黒色女王蜂児ウイルス (BQCV)	26	87%	7	64%
チヂレバネウイルス (DWV)	25	83%	5	45%
イスラエル急性麻痺病ウイルス (IAPV)	14	47%	1	9%
ミツバチヘギイタダニ (<i>Varroa destructor: V. d</i>)	11	37%	8	73%
カシミヤウイルス (KBV)	10	33%	0	0%
トウヨウミツバチノゼマ (<i>Nosema ceranae: N. c</i>)	7	23%	0	0%
サックブルードウイルス (SBV)	6	20%	5	45%
急性麻痺病ウイルス (ABPV)	2	7%	0	0%

飼育ミツバチの病原体遺伝子保有状況調査

一方、本県の家畜保健衛生所が、2016年6月～翌年8月、管内15市町村の養蜂家38戸41群(セイヨウミツバチ30群、ニホンミツバチ11群)を対象に、14種の病原体について遺伝子保有状況調査を実施した。材料は、巣門付近で死亡または衰弱した働き蜂とし、該当個体がない場合は健常な働き蜂を捕集した。方法は、働き蜂の個体を試薬中で潰した懸濁液から核酸を抽出し、PCR法またはRT-PCR法を実施した。その結果、14種のうちダニを含む8種が検出された^{〔表2〕}。

セイヨウミツバチではすべての群から病原体遺伝子が検出され、中でも27群からは複数の遺伝子が検出され、3種の検出が7群と最多であり、7種検出した群も1群認めた。このことはほぼすべての群に同様の病原体が常在していることを示している。

また、同じ日に採材した直線距離600m離れている養蜂場2か所で、類似した病原体遺伝子保有パターンが認められた。このことから、迷い蜂による病原体の水平感染が考えられる。

健康なミツバチ強化のための対策

今回の調査等で、一見健常な蜂群であっても複数の病原体を高率に保有しており、常に不顕性感染(感染はしているが発症はしていない)の状態にあることが明らかとなった。

またダニは多くの病原体を媒介するため群勢への影響が非常に大きい。このことから群勢が弱くなる前に薬剤を適正に使用しながら、栄養剤の補給、また蜂場・器具等の消毒、巣箱等の更新などの総合的な衛生管理意識を強く持つことが、地道ではあるが、「ミツバチの健康をより強化するための対策」として重要なことであると考ええる。

Appendix

主なウイルス病

a. サックブルード(Sac brood)病

本ウイルスに感染すると、蛹期に袋状になり、頭部側に水がたまった透明状態になることからサックブルードと呼ばれている。



図20 サックブルード病に罹った幼虫

サックブルードウイルスは、成虫にも感染するが発症はしないため、キャリアとして幼虫に感染を広げる原因となっているようである。日本では、セイヨウミツバチでの重症例はほとんど知られていない。一方トウヨウミツバチでは大きな被害をもたらす。トウヨウミツバチとセイヨウミツバチに感染するウイルスは遺伝的に違う系統であることが分かっている。

2009年から韓国で大発生して、韓国のトウヨウミツバチの養蜂は大打撃を受けた。我が国で数年前からニホンミツバチで九州を中心に報告されている蜂児捨て(働き蜂が幼虫を穴から引っ張り出して捨てる)現象の原因と考えられている。

b. 麻痺病

数種の麻痺病ウイルスの存在が知られている。春から夏に多く発生する。症状は蜂群の中で一部の個体にしか現れないため、気がつかないうちに一過性で収まることが多い。発症すると胸部背面および腹部の体毛が脱落し、体色が黒っぽくなる。感染した働き蜂は飛べず、体や翅を痙攣させ死亡する。感染個体が多い場合には巣門前に数百の死体が見られることがある。麻痺ウイルスには、これまでAcute bee paralysis virus (ABPV)、Israel acute paralysis virus (IAPV)、Kashmir bee virus (KBV)、Slow paralysis virus (SPV)、Chronic paralysis virus (CPV)が知られている。これらのウイルスもミツバチヘギイタダニによって媒介されると考えられるので、ダニの駆除がこれらのウイルス病に第一義的な予防法である。



図21 麻痺病に罹った成虫

c. チヂレバネウイルス(Deformed wing virus)

このウイルスに感染した成虫は、翅が縮むとともに小型になるので判別が容易であり、ミツバチヘギイタダニ寄生の指標ともなる。



図22 チヂレバネウイルスの感染で翅が縮れる成虫

幼虫期で発症すると死亡すると考えられている。他のウイルス同様、ミツバチヘキイタダニによって媒介する。

d. 黒色女王蜂児病(Black queen cell virus)

女王蜂の幼虫や蛹の段階で発症する。王台の色が、茶色から黒色になるのが特徴で、王台の中で幼虫が死んでいる。働き蜂や雄蜂では発症しないと考えられている。先の調査では、このウイルス保有働き蜂が多く発見されている。女王のみの発症であるので、ただ単に見逃しているだけである可能性が高い。

アピスタン・アピパールの利用方法

アピスタンの有効成分フルバリネートは脂溶性で、ハチミツ中には残留しにくい反面、蜜ろうに残留する。米国における巣内で検出される化学物質で最も高い濃度で検出されるのはフルバリネートである。このため、ミツバチ減少にも何らかの影響を与えていることが懸念されている。フルバリネートと同じ成分の、植物ダニ用の殺ダニ剤が市販されているが、代替品として使用してはいけない。また、フルバリネートと同様のピレスロイド系の殺ダニ剤として、フルメトリンを有効成分とする製品が海外では販売されているが日本では承認されていないため使用することはできない。フルメトリンの使用は、ピレスロイド系薬剤同士で交差活性があると考えられ、抵抗性ダニの出現を助長しないためにも違法な薬剤は使用してはいけない。なお残留基準値はフルバリネートが0.05ppmに対して、フルメトリンはその10分の1の0.005ppmである。

一方、アピパールの有効成分はアミトラズで、同じ成分の殺ダニ剤が、植物用殺ダニ剤として市販されている。アミトラズは水溶性で蜜ろうには残留しにくい。また加水分解して無毒の物質に変わるため、残留に対する懸念が小さいとされている。しかし、湿度が高いと分解し効力が下がる可能性もある。また、これらの残留に関するデータは、巣内環境での試験ではない物が多く、実際、貯蔵花粉に、高濃度で残留するというデータもあり、決して巣内に残留しないと言うことではないことに注意が必要である。アピスタン同様、アミトラズと同じ成分の植物ダニ用の殺ダニ剤が市販されているが、代替品として使用してはいけない。

殺ダニ剤は春季(2～3月)と秋季(10～11月)に1回ずつ薬剤処理を行うことが有効である。使用期限(6週間)、使用量(巣板4枚あたり1枚)を必ず守り、説明書にしたがい、用法を守る。アピスタン及びアピパールは休薬期間が設けられていない。使用上の注意として、採蜜期間中及びローヤルゼリーの採取期間中は使用してはならず、本剤を使用した蜂群のローヤルゼリー及びプロポリス並びに蜂体は食用にできないと記載されている。使用効果を上げるために、巣板の数を減らして蜂の密度を上げることが推奨されている。抵抗性ダニ発生を回避するためにこの1剤を隔年交代で使うことが望ましい。両方の薬剤を同時に使用することは、殺ダニ剤に対するミツバチのLD50値の低下(感受性の増加)の可能性がある。また、殺ダニ剤総量の管理が難しく用量

を超える可能性もあり、結果としてミツバチに対する毒性の上昇も起こり得るので、この点からも同時併用は避けることを勧める。



図23 日農アピスタン
(日本農業株式会社提供)



図24 アピパール
(アリストヘルスアンドニュートリションサイエンス株式会社提供)



図25 ダニ駆除剤投入の様子
(日本農業株式会社提供)

養蜂技術指導手引書 **V**

養蜂における衛生管理 ダニ防除技術

平成30年11月発行

発行所

一般社団法人 日本養蜂協会

〒104-0033 東京都中央区新川2丁目6-16 馬事畜産会館6階

著者

木村 澄

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
畜産研究部門 家畜育種繁殖研究領域

松山 茂

筑波大学生命環境系

中村 純

玉川大学農学部先端食農学科

浅田研一

福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター

協力

日本農薬株式会社

アリスタヘルスアンドニュートリションサイエンス株式会社

本書の商業目的による、無断複写及び複製、転載を禁止します。

【非売品】